

# JK<sup>アンド</sup>DK大調査

函館市内の高校生  
生活実態調査 報告書



平成28年11月

NPO法人函館市青年サークル協議会  
北海道教育大学函館校 今在研究室

## はじめに

### Introduction

本調査は「JK & DK 大調査」という表題で、函館市内の高校生(一部隣接市内高校生を含む)を対象としたアンケート調査の結果をまとめたものです。

函館市青年センターの指定管理者であるNPO法人函館市青年サークル協議会は、センターのサービス向上を目的として、高校生の生活実態と彼らのニーズを把握するために本調査を計画しました。一方、今在研究室は、協議会からの協力依頼を受け、質問項目の選定、WEB上でのアンケート公開、データ収集、統計分析を行いました。また、分析結果は学術研究、大学での教育に活用することになっております。

調査内容は、学校生活、希望進路、そして、函館に対する印象や要望などについてたずねています。

本調査結果が、青年センターの運営に活用される基礎資料としてだけでなく、広く教育関係者やまちづくりに意欲のある方々に活用していただけるような参考資料となれば幸甚に思います。

なお、調査にあたっては以下の高等学校に協力を得ました。ここに厚くお礼申し上げます。

遺愛女子高等学校

市立函館高等学校

函館大妻高等学校

函館白百合学園高等学校

函館大学付属柏稜高等学校

函館大学付属有斗高等学校

北海道函館工業高等学校

北海道函館商業高等学校

北海道函館水産高等学校

北海道函館中部高等学校

北海道函館西高等学校

北海道函館稜北高等学校 (アイウエオ順)

NPO法人函館市青年サークル協議会理事・函館市青年センター長

仙石 智義

北海道教育大学函館校准教授  
今在 慶一朗



## 目次

Table of contents

1. 調査の概要 .....	1 ページ
2. 学校生活 .....	2 ページ
3. 希望進路 .....	4 ページ
4. 暮らしぶり .....	7 ページ
5. あとがき・総括 .....	15 ページ
6. 付 錄 .....	17 ページ

## 調査の概要

Overview of the survey

### 調査方法

本調査はWEB上で回答する方法をとった。Googleフォームを利用し、質問項目を入力し、各項目に対する回答方式を指定した。二重回答を避けるため、調査対象である高校生には通し番号のついたチラシを配布した。回答者は、回答の際、通し番号を入力した後、質問項目に回答を行った。チラシには、謝礼としての図書券が抽選で当たることを記し、抽選はチラシの通し番号を使用して行い、青年センターのウェブサイトで当選者を発表することとした。



### 調査時期

2016年8月中旬から高等学校16校(このうち1校は北斗市に所在)に対して、1年生から3年生に対してチラシの配布を電話で依頼したところ、13校から承諾を得た。この13校に対し、全校生徒分のチラシを送付した。ただし、承諾を得た1校からは1件も回答が得られなかつたことから、実際にはチラシが配布されていなかつた可能性も示唆され、協力校は12校にとどまった。各校の回答者数は表1の通りである。なお、全16校の学生の合計は8,099名であり、協力を得た12校の合計は6,617名である。

表1 通学校別回答者数

中部	113	16.5%
遺愛	94	13.7%
市立	90	13.2%
柏稜	86	12.6%
工業	63	9.2%
商業	45	6.6%
稟北	42	6.1%
有斗	38	5.6%
西	37	5.4%
大妻	31	4.5%
水産	23	3.4%
白百合	22	3.2%
合計	684	100.0

協力校は、遺愛女子高等学校、市立函館高等学校、函館大妻高等学校、函館白百合学園高等学校、函館大学附属柏稜高等学校、函館大学附属有斗高等学校、北海道函館工業高等学校、北海道函館商業高等学校、北海道函館水産高等学校(北斗市)、北海道函館中部高等学校、北海道函館西高等学校、北海道函館稟北高等学校であった。

### 回答者数とデータの信頼性

684名からの回答を得た。協力校の全生徒数を調査対象者と考えると、回収率は10.3%であり、かなり低いため、回収率の面からみれば、本データの信頼性は十分であるとはいがたい。しかしながら、学校から協力を承諾されても、実際の配布段階で配布漏れがあったようであり、配布された生徒数に対する正確な回収率は不明である。

他方、全生徒数は協力を得られなかった学校を含めて8,099であるが、仮に社会調査で一般的とされる方法で、最大誤差を0.05、信頼性係数を0.95、母平均比率を0.5とした場合、367名の回答があれば母集団<sup>\*1</sup>に対するデータの信頼性は確保されていると考えられることから、本調査で得られたデータ数は函館の高等学校に通う生徒の実情を一定程度反映していると考えられる。

表2 回答者の性別

女子	417	61.0%
男子	267	39.0%
合計	684	100.0%

なお、回答者の性別、学年、公立・私立の別について

は表2～4の通りである。回答者は女子が多く、また、公立の生徒が多かった。

表3 回答者の学年

1年生	205	30.0%
2年生	227	33.2%
3年生	252	36.8%
合計	684	100.0%

表4 回答者の公立私立別

公立	413	60.4%
私立	271	39.6%
合計	684	100.0%

\*1 調査で推定する集合全体のこと。

## 学校生活

### School life

#### 通学手段

春から秋にかけての雪のない時期の通学時間は平均31分(*SD* 24分)、冬季の通学時間の平均は42分(*SD* 26分)であった<sup>※2</sup>。

本調査では、季節別に通学手段をたずねておらず、一年を通して利用する手段についてたずねているが、自転車の利用が7割を超え、突出していることが示された。これに続いて、バスの利用、自家用車の利用が約半数を占めている。他方、路線が限られているためか、JRや路面電車の利用率はさほど高くない。このことから、自転車が使用で

表5 通学手段

きくなる冬 季には通学手 段としてバス の重要性が高 まると考えら れる（表5）。	自転車の利用	510	74.6%
	バスの利用	334	48.8%
	自家用車の利用	297	43.4%
	路面電車の利用	122	17.8%
	JRの利用	91	13.3%
	もっぱら徒歩	144	21.1%

また、4割以上が自家用車を利用すると回答した。自転車やバスの利用率を考慮すれば、毎日、全行程で自家用車を利用しているとは考えられないが、家からバス停までの一部区間の送迎、雨や雪で道路状況がよくない日の送迎、また日没後暗くなつてからの送迎など、両親が日常的に子どもを車で送迎している様子がうかがわれる。

また、表6に示した交通機関への要望を見ると、全体的に要望事項は少ないように思われるものの、バスの運行本数の増加だけは半数の回答者が希望していた。また4割程度の回答者が除雪による遅れの解消を望み、3割程度の回答者が夜10時以降の深夜の運行を望んでいることから、高校生のバスに対する依存度の大きさがうかがわれる。このようなバスに対する要望の割合に対し

#### 表6 交通機関への要望

バスの運行本数の増加	347	50.7%
道路の除雪の徹底による遅れの解消	254	37.1%
SUICAやPASMO等のカード導入	242	35.4%
バスを夜10時以降に運行	220	32.2%
バスの運行経路をわかりやすくする	198	28.9%
バスや路面電車の運賃の値下げ	180	26.3%
路面電車の路線拡充	121	17.7%
路面電車を夜10時以降に運行	110	16.1%
路面電車の運行本数の増加	87	12.7%
バスや路面電車の外装の向上	40	5.8%

て、路面電車に対する要望については、いずれの項目についてもさほど高くはない。路線が限られる路面電車は、利用の機会が限られてしまっているために、その利便性の向上が期待されることもないのかもしれない。このことは、後述する函館に対する愛着についての分析でも、路面電車を好きと答えた回答者が18.6%にとどまつことを併せて考えると、函館らしさを象徴するものの一つと思われる路面電車は、日常生活を送る高校生にとっては、さほど親しみの持てる対象ではないのかもしれない。

#### 学校生活

「学校生活満足」「教師への信頼」「生徒間人間関係」「学習意欲」「学習理解」「部活動等への意欲」について1(否定的)から6(肯定的)までの6件法で回答を求め、得られた平均値は表7の通りである。

いづれの得点も中点である3.5を上回っており、全体としては学校生活に適応している様子がうかがわれる。

全体的な評価と考えられる学校生活満足と他の項目との相関関係について分析したところ<sup>※3</sup>、教員への信頼(0.55\*\*), 生徒間人間関係(0.61\*\*), 学習意欲(0.43\*\*), 学習理解(0.43\*\*), 部活動などへの意欲(0.43\*\*)のいづれも中程度の関連性があることが示された。

表7 学校生活に対する感情

	平均値	SD
学校生活満足	4.32	1.24
教員への信頼	4.08	1.29
生徒間人間関係	4.50	1.19
学習意欲	4.08	1.29
学習理解	4.08	1.21
部活動等への意欲	4.49	1.48

※2 SDは「標準偏差」。「平均31分(*SD* 24分)」を例にとると、およそ2/3の生徒が31±24分、すなわち7分から55分の時間をかけて通学していることになる。

※3 Pearsonの積率相関係数 $r$ を用いた $r$ は0から1までの値をとり、0は無相関、1は完全に一致することを示す。また、\*は「危険率」を表し、0から100%までの値をとるが、相関分析の結果が誤りである可能性を示す。\*は5%、\*\*は1%、\*\*\*は0.1%を表す。

## 得意教科

得意教科については、表8に示したように、全体的にいざれの教科についても得意であると感じる回答者は少數であった。その中でも、数学と体育については得意であるという回答が全体の3割ほど確認された。これに国語、英語、地歴、芸術が2割台で続いている。

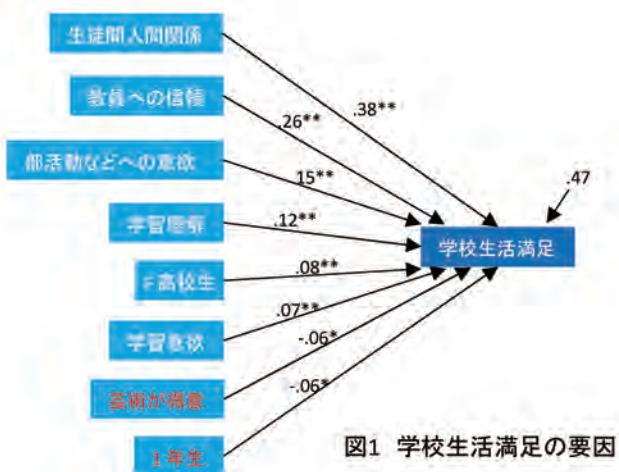
表8 得意科目

英語が得意	161	23.5%
国語が得意	183	26.8%
数学が得意	207	30.3%
理科が得意	135	19.7%
公民が得意	76	11.1%
地歴が得意	151	22.1%
芸術が得意	140	20.5%
技・家が得意	89	13.0%
体育が得意	206	30.1%

## 学校満足の要因

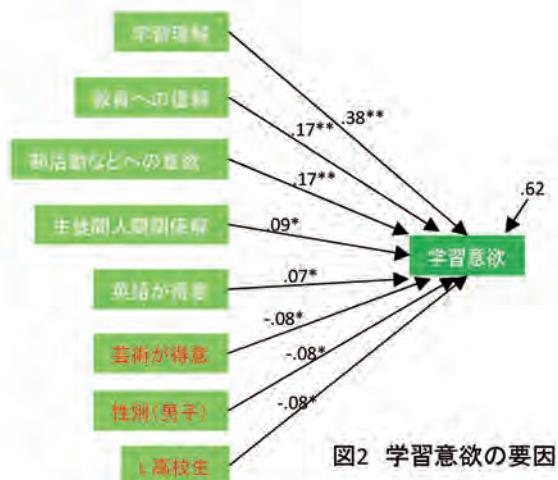
先にふれた学校生活満足に対して、性別、通学する高校、学年、得意科目、学校生活に対するその他の感情の影響を調べるために、重回帰分析を行った。図1は学校生活満足に対して影響を与えることが示唆された項目である<sup>※4</sup>。

分析の結果、学校生活に満足を感じさせる最も強い項目は、生徒間人間関係や教員への信頼といった学校内における人間関係に関するものである様子がうかがわれる。また、それに次いで、部活動や理解しながら学習するといった、主体性が伴うと考えられる活動が影響する様子もうかがわれる。このことは、人間関係に困難を抱



えたり、他律的に活動を強いられたりする生徒の場合、満足感が低下しやすいことを示唆している。また、興味深いのは、さほど強い効果ではないものの、F高校(実業系のコースに多くの学生が所属している)の場合、単にこの学校に通学することによって満足感が高まりやすいことがうかがわれる。さらに、わずかな効果ではあるが、芸術が得意な生徒と1年生は、学校生活に満足しにくい傾向があること示された。

同様の方法で、図2に示したように、学校生活満足の代わりに学習意欲の要因について調べたところ、やはり学習理解が最も強い促進要因であることが示された。これに教員への信頼と部活動などへの意欲が続くことから直接勉強とは関係ない部活動や他の生徒との良好な人間関係が学習への動機づけを高めることに有効である様子がうかがわれる。また、教科の中でも必修であったり、受験科目で課せられやすかったりするためか、英語に自信を持てることが学習意欲を促進しやすいことも示された。その一方で、芸術が得意な生徒、男子生徒、L高校の生徒は学習意欲が低下しがちである傾向が弱いながらも確認された。



※4 図の数字は「標準偏回帰係数(β)」を表している。相関係数 $r$ 同様、0から1までの値をとる。マイナスは抑制効果があることを示す。学校生活満足の右上の数値.47(47%)は、この分析ではとらえられない学校生活満足の要因の大きさを表しており、1(100%)からAdjusted R<sup>2</sup>(この分析で仮定された要因による説明力)を引いた値である。また、本分析では変数投入法としてStepwise法を用い、要因となる項目を探査した。

## 希望進路

The course your hope

### 進路選択と進学希望

希望する進路については、表9に示したように、半数の回答者が大学への進学を希望していた。その一方で就職を希望する者は全体の2割に満たなかつた。また、短期大学への進学を希望する者は全体の3%程度であり、進学先が大学か専門学校に二極分化していることが示唆された。

進学する際に重要視するポイントについてたずねた質問では、「進学するつもりはない」と回答したのは、全体の17.5%にあたる120人にとどまつたことから、ほとんどの生徒は進学を希望していることが示唆された(表9の数値とは数名の不一致があるが、「進学をする場合、…」とたずねているため、就職する予定でも仮の話として回答した生徒が数名いたと思われる)。そこで、「進学するつもりはない」と回答した者を除き、残りの

表9 希望する進路

就職	126	18.4%
専門学校	146	21.3%
短大	21	3.1%
大学	345	50.4%
決めていない	43	6.3%
その他	3	0.4%
合計	684	100.0%

表10 進学する場合のポイント

学科、専攻、コース	357	63.3%
資格取得や将来の職業	330	58.5%
国公立であること	179	31.7%
学費の安さ	165	29.3%
合格難易度	133	23.6%
札幌や東京などの大都市にあること	67	11.9%
自宅から通えること	66	11.7%
部活やサークル	52	9.2%
世間の評判	41	7.3%

ないのは「世間の評判」や「部活やサークル」であったが、それについて「自宅から通えること」や「札幌や東京などの大都市にあること」を重視する回答者も1割程度であった。これらのことから、進学を希望する高校生は、学習の内容本位で進学先を選ぼうとしており、学ぼうとする内容がある進学先であれば、地域に関係なく進学しようとする志向性があるのではないかと考えられる。

次に、再びすべての回答者を対象として、希望する進路と卒業後に希望する居住地域の関係について集計を行った。表11に示したように、まず、全体としては函館にとどまりたいと考える回答者は3割弱であり、残りの6割が札幌などの道内他地域と東京などの道外他地域に分かれていることから、基本的に函館外で暮らすことを希望する回答者が多数派である。しかし、この傾向は就職希望者と大学進学希望者では大きく異なる。就職希望者は半数が函館に留まることを希望しているのに対し、大学進学希望者で函館に留まることを希望するのは15%程度に過ぎず、7割が道内・道外の他地域に移動することを希望している。

進学希望者の多くが、学ぶ内容を重視し、地域にこだわらない様子を示唆していたことを併せて考慮すると、他の大都市と比較して大学の数や学部の種類が豊富とはいえない函館は、大学進学希望者にとっては高校卒業後に留まることが難しい地域であると考えられる。全回答者の半数が大学進学を希望していたことを考えれば、現在、市内の大学に設置されている学部・学科・コースが豊富でないことが函館の人口流出、若者流出の一因に

表11 希望する進路と卒業後の希望居住地

希望する進路	卒業後の希望居住地					
	函館	道内他地域	道外他地域	海外	どこでもよい	合計
就職	64	17	25	1	19	126
	50.8%	13.5%	19.8%	0.8%	15.1%	100.0%
専門学校	50	53	28	1	14	146
	34.2%	36.3%	19.2%	0.7%	9.6%	100.0%
短大	15	1	2	1	2	21
	71.4%	4.8%	9.5%	4.8%	9.5%	100.0%
大学	50	137	109	3	46	345
	14.5%	39.7%	31.6%	0.9%	13.3%	100.0%
決めていない	14	6	6	2	15	43
	32.6%	14.0%	14.0%	4.7%	34.9%	100.0%
その他	0	0	1	2	0	3
	0.0%	0.0%	33.3%	66.7%	0.0%	100.0%
合計	193	214	171	10	96	684
	28.2%	31.3%	25.0%	1.5%	14.0%	100.0%

564人について進学する際のポイントについて集計を行った。この結果、表10に示したように、「学科、専攻、コース」「資格や将来の職業」を重視している様子が示唆された。反対に、最も重視され

なっている可能性があると考えられる。

さらに、「あなたは函館の街をどのくらい好きですか」(全然好きでない(1)～非常に好き(6))という質問について集計したところ、表12に示したように、その他と回答した3名を除いた他の群で平均点は4点台であり、全体として函館の街に対して好意的な反応を示していた。回答者数が極端に少ないその他を除く群について分散分析を行ったところ、就職、専門学校、短大、大学、決めていないのいずれの間にも統計的に有意な差は認められなかった( $F(5, 678)=1.87, n.s.$ )<sup>\*5</sup>。

表12 函館に対する好意度の進路希望別比較

	度数	平均	SD
就職	126	4.73	1.18
専門学校	146	4.42	1.30
短大	21	4.81	1.21
大学	345	4.52	1.25
決めていない	43	4.33	1.25
その他	3	3.33	2.08
合計	684	4.53	1.26

以上の結果を総合すると次のように推測することができよう。まず、全体として高校生は函館の地域に好意的である。そして、大学進学を希望する高校生の場合、学習内容について選択の余地がないため、函館を離れようと考える。これに対して、卒業後就職を希望する高校生の場合、大学ほど選択の余地がないわけではないことから、そのまま函館で暮らそうとする者の割合が高い。しかしながら、大学への進学を希望する高校生が多いために、全体としては、若者の函館離れが進行すると考えられる。

\*5 群の違いが原因で生じる効果を主効果といい、本分析の結果は統計的に主効果があるとは認められないこと(non-significant)を示している。

\*6 表の各カテゴリーの3行目は「調整済み残差」という数値で、1.96を超えると統計的に有意(誤っている危険性が5%未満)に割合が多く偏っていることを示す。反対に、-1.96を下回る場合には、有意に割合が少ないと示す。

### 希望する将来の職業

希望する将来の職業については表13の通りである。ばらつきが大きいが、医療関係技術者の人数だけが突出しており、全体の約1/4が希望している。それから大きく離れて、まだ決めていないが12%で、一般公務員、会社員、サービス業が9%前後で続いている。

表13 希望する職業

会社員	61	8.9%
自営業・会社経営	6	0.9%
農家・漁業	5	0.7%
販売員	13	1.9%
サービス業	60	8.8%
放送関係	11	1.6%
芸術芸能関係	38	5.6%
生産労務職	19	2.8%
運輸職	4	0.6%
IT・機械技術者	36	5.3%
法律関係の専門	6	0.9%
医療関係の技術	164	24.0%
福祉団体職員	13	1.9%
教員・保育士	46	6.7%
一般公務員	65	9.5%
保安職公務員	25	3.7%
研究者	7	1.0%
主婦・家事手伝い	4	0.6%
まだ決めていない	83	12.1%
その他	18	2.6%
合計	684	100.0%

表14の左側に示した性別ごとの集計結果を見ると、サービス業、芸術芸能関係、医療関係技術者については女子の割合が多く、生産労務職、IT・機械技術者、保安職公務員、まだ決めていないについてでは男子の割合が多くかった<sup>\*6</sup>。とくに、医療関係技術職については、希望する男子も10%程度であり、他の職業と比べても決して少なくないが、女子に至っては全体の約1/3が希望している。一般に看護学校の学生は女子が顕著に多いことから、看護師を志望する女子生徒が医療関係技術者の人気を押し上げていると考えられる。また、教員・保育士については、残差の値が統計的に有意とされる水準をわずかに下回ったがやはり女子の希望者が多いことが示された。保育士の希望者が多く含まれているためと考えられる。

学年ごとの集計結果を見ると、まだ決めていない生徒が着実に減少する一方で、会社員、医療関係職、保安職公務員の希望が学年とともに上昇する様子が示唆された。なお、会社員、サービス業の希望がU字型、IT・機械技術者の希望が逆U字型に変化している様子が見られる。本調査からその理由を推測することは困難であるが、高校生活中盤における職業意識形成における試行錯誤が反映された結果なのかもしれない。

表14 男女別、学年別希望職業

	女子	男子	合計	1年生	2年生	3年生	合計
会社員	32	29	61	18	13	30	61
	7.7%	10.9%	8.9%	8.8%	5.7%	11.9%	8.9%
	-1.4	1.4		-0.1	-2.1	2.1	
販売員	7	6	13	2	6	5	13
	1.7%	2.2%	1.9%	1.0%	2.6%	2.0%	1.9%
	-0.5	0.5		-1.2	1.0	0.1	
サービス業	47	13	60	23	11	26	60
	11.3%	4.9%	8.8%	11.2%	4.8%	10.3%	8.8%
	2.9	-2.9		1.5	-2.6	1.1	
放送関係	8	3	11	2	6	3	11
	1.9%	1.1%	1.6%	1.0%	2.6%	1.2%	1.6%
	0.8	-0.8		-0.9	1.5	-0.7	
芸術芸能関係	29	9	38	13	16	9	38
	7.0%	3.4%	5.6%	6.3%	7.0%	3.6%	5.6%
	2.0	-2.0		0.6	1.2	-1.7	
生産労務職	3	16	19	1	9	9	19
	0.7%	6.0%	2.8%	0.5%	4.0%	3.6%	2.8%
	-4.1	4.1		-2.4	1.3	1.0	
IT・機械技術者	8	28	36	8	21	7	36
	1.9%	10.5%	5.3%	3.9%	9.3%	2.8%	5.3%
	-4.9	4.9		-1.0	3.3	-2.2	
医療関係技術者	135	29	164	39	55	70	164
	32.4%	10.9%	24.0%	19.0%	24.2%	27.8%	24.0%
	6.4	-6.4		-2.0	0.1	1.8	
福祉団体職員	9	4	13	4	5	4	13
	2.2%	1.5%	1.9%	2.0%	2.2%	1.6%	1.9%
	0.6	-0.6		0.1	0.4	-0.5	
教員・保育士	34	12	46	11	16	19	46
	8.2%	4.5%	6.7%	5.4%	7.0%	7.5%	6.7%
	1.9	-1.9		-0.9	0.2	0.6	
一般公務員	34	31	65	24	19	22	65
	8.2%	11.6%	9.5%	11.7%	8.4%	8.7%	9.5%
	-1.5	1.5		1.3	-0.7	-0.5	
保安職公務員	6	19	25	4	5	16	25
	1.4%	7.1%	3.7%	2.0%	2.2%	6.3%	3.7%
	-3.9	3.9		-1.6	-1.4	2.9	
まだ決めていない	40	43	83	38	29	16	83
	9.6%	16.1%	12.1%	18.5%	12.8%	6.3%	12.1%
	-2.5	2.5		3.4	0.4	-3.5	
その他	25	25	50	18	16	16	50
	6.0%	9.4%	7.3%	8.8%	7.0%	6.3%	7.3%
	-1.7	1.7		1.0	-0.2	-0.7	
合計	417	267	684	205	227	252	684
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

各カテゴリーの3行目の数字は調整済み残差

## 起床、就寝、朝食

起床時間の平均は6時28分、標準偏差は1時間4分であったことから、おおむね5時半から7時半にかけて起床している<sup>※7</sup>。

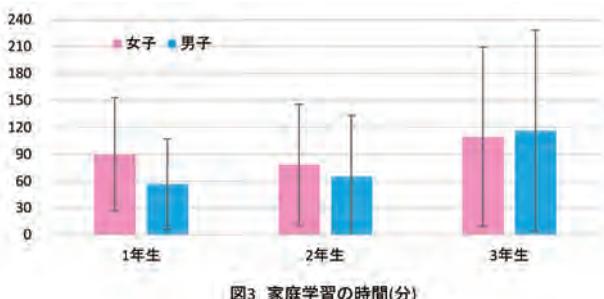
朝食についてはおおむね、だいたい食べるとした回答が大半を占めたが、高校3年生については、だいたい食べる割合が低下し(調整済み残差-2.6)、食べたり食べなかつたりするとした回答が多い(同じく2.1)ことから、朝食をとる習慣のあった生徒たちの中から朝食をとらなくなる者が生じる様子がうかがわれる(表15)。

表15 朝食

	ほとんど 食べない	食べたり 食べなかつたり	だいたい 食べる	合計
女子	24 5.8%	46 11.0%	347 83.2%	417 100.0%
男子	20 7.5%	36 13.5%	211 79.0%	267 100.0%
合計	44 6.4%	82 12.0%	558 81.6%	684 100.0%
1年生	8 3.9%	23 11.2%	174 84.9%	205 100.0%
2年生	16 7.0%	20 8.8%	191 84.1%	227 100.0%
3年生	20 7.9%	39 15.5%	193 76.6%	252 100.0%
合計	44 6.4%	82 12.0%	558 81.6%	684 100.0%

## 授業外学習

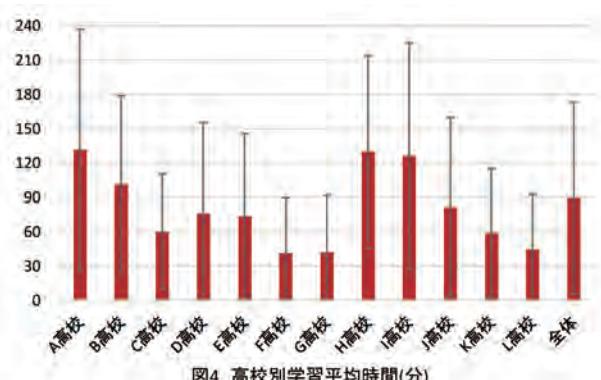
授業外での学習時間を学年と性別の2要因分散分析を行ったところ、交互作用が見られた( $F(2, 676) = 3.23, p < .05$ )<sup>※8</sup>。詳細は省略するが多重比較の結果<sup>※9</sup>、図3に示したように、女子については、3年生は2年生よりも学習時間が長く(1年生は2年生と3年生の間に位置するがその差は統計的に有意とはされなかった)、男子学生については、3年生が、1年生および2年生よりも学習時間が長いことが確認された。また、1年生につい



ては女子が男子よりも学習時間が長いことが確認された。これらの結果から入学直後は女子学生の学習時間が長いものの、高校3年生になって男子学生の学習時間が急激に伸びる様子がうかがわれる。

また、平均時間に対して標準偏差<sup>※10</sup>が大きいことが分かる。このことから、先に述べたような男女、学年の違いで平均時間に違いはあるものの、全く学習しない生徒と長時間学習する生徒の間には非常に大きな差がある様子がうかがわれる。高校3年生男子を例にとると、標準的な範囲にある生徒(全体の約2/3)ですら、116 ± 112分、すなわち3分から4時間弱までの開きがあることになる。

また、学校別の平均値の差についてみると、図4に示したように、各校の差が大きいことがわかる。さらに、全体的に見れば、平均時間は約1時間半程度(89分)であるが、やはり標準偏差が84分であるため、全く学習しない生徒であっても、3時間近く学習する生徒であっても、特別まれなわけではなく、いずれも標準的な様子であるといえる。なお、学習時間が1時間以下と回答した生徒は全体の56.3%、20分以下と回答した生徒は全体の20.2%を占めていた。



※7 就寝時間については入力ミスと思われるケースが多かったため分析を断念した。

※8 学年と性別ごとに平均点が異なるということ。

※9 Bonferroni の方法による多重比較。

※10 図3のグラフの棒についている線分が標準偏差を表す。

**表16 授業以外の学習施設・業者**

塾・予備校を利用	70	10.2%
家庭教師を利用	14	2.0%
放課後の学校を利用	157	23.0%
中央図書館を利用する	102	14.9%
青年センターを利用する	56	8.2%

授業以外の学習をするさいに、利用する施設、業者についてたずねたところ、表16に示したように、塾・予備校、家庭教師といった専門の業者を利用する生徒は少數であることがわかる。このことから、高校生の多くは授業外の学習を自習で行っていると考えられる。先に述べたように、授業以外にほとんど学習しない生徒も相当数いると考えられることから、補習や受験対策などに対応してくれる業者に対する需要が少ないとも考えられる。

他方、自習の場としてはそのほとんどが自宅であると推測されるが、回答者の2割が放課後の学校を利用していることが示された。住宅事情等の理由により、「家庭では集中しにくい」と感じる生徒は放課後の学校や図書館などの無料の公共施設を利用すると考えられるが、学校は下校時刻が夕方であるため、夜間の学習の場に対するニーズに対応することができない。図書館や青年センターの自習コーナーを利用する回答者が一定数いることは、そのような夜間の学習スペースに対するニーズを反映していると考えられる。

**表18 レジャー施設・娯楽施設**

	映画館	ファーストフード 喫茶店	ゲーム センター	ジム・プール (公共)	カラオケ	ジム・プール (民間)
女子	43	167	80	12	166	8
	10.3%	40.0%	19.2%	2.9%	39.8%	1.9%
	-0.1	2.4	-3.0	-4.3	2.2	-2.2
男子	28	83	78	29	84	13
	10.5%	31.1%	29.2%	10.9%	31.5%	4.9%
	0.1	-2.4	3.0	4.3	-2.2	2.2
合計	71	250	158	41	250	21
	10.4%	36.5%	23.1%	6.0%	36.5%	3.1%
	ショッピング センター	公園・森林 海・山	書店	公共の 文化施設	レンタル ビデオ	とくにない
女子	201	45	205	37	70	44
	48.2%	10.8%	49.2%	8.9%	16.8%	10.6%
	7.3	-2.7	1.9	1.6	-0.2	-2.8
男子	55	48	111	15	46	48
	20.6%	18.0%	41.6%	5.6%	17.2%	18.0%
	-7.3	2.7	-1.9	-1.6	0.2	2.8
合計	256	93	316	52	116	92
	37.4%	13.6%	46.2%	7.6%	17.0%	13.5%

**余暇、自由時間をすごす場所**

学習以外の活動についてたずねたところ、表17に示したように、学校の部活をしているという回答が約6割を占めることが示された。次に多い個人的な趣味が4割程度であり、他の活動をしている割合と比較して部活動をしている割合が非常に大きいことが示された。授業、自習、部活動のいずれもが学校で行われることから、学校が高校生にとって包括的な生活の場になっている様子がうかがわれる。

また、先の学校生活に対する満足や学習意欲でも部活動などに対する意欲が人間関係や学習理解に次ぐ要因となっていたことから、部活動が学校生活全体の適応にとって主要な要因となっていると推測される。

よく利用する(1か月に1回以上)娯楽施設についてたずねたところ、表18に示したように、全体的には、特に利用が目立つ施設があるようには思われないが、書

**表17 自由活動**

学校の部活	388	56.7%
習い事、校外サークル	64	9.4%
個人的な趣味	250	36.5%
資格の取得や英語検定	93	13.6%
ボランティア	44	6.4%
アルバイト	84	12.3%
とくにない	85	12.4%

各カテゴリーの3行目の数字は調整済み偏差

店が4割台、ショッピングセンター、カラオケ、ファーストフード・喫茶店が3割台、ゲームセンターが2割台となっていた。書店やショッピングセンターについては、生活や学業に必要なものを購入する場でもあり、娯楽以外の目的でも訪れるため、相対的に他の施設よりも利用されやすいと考えられる。先の分析で示唆されたように、高校生は生活の大半を学校で過ごすと考えられるうえ、後述する小遣いの額を考慮すると、下校時に立ち寄りやすく、また、小銭程度の金額を使って楽しめるカラオケやファーストフード、ゲームセンターが好まれやすいのかもしれない。

男女別では、ショッピングセンター ( $\chi^2(1)=52.96, p < .01$ )<sup>※11</sup>、カラオケ ( $\chi^2(1)=4.89, p < .05$ )、ファーストフード・喫茶店 ( $\chi^2(1)=5.64, p < .05$ ) については女子の割合が、ゲームセンター ( $\chi^2(1)=9.22, p < .01$ )、公園・森林・海・山 ( $\chi^2(1)=7.16, p < .01$ )、ジム・プール(民間) ( $\chi^2(1)=4.76, p < .05$ )、ジム・プール(公共) ( $\chi^2(1)=18.41, p < .01$ )、とくにない ( $\chi^2(1)=18.41, p < .01$ ) については男子の割合が相対的に高かった。女子が室内での消費、娯楽に関する施設を選択し、男子が身体活動に関する施設を選択しやすい様子がうかがわれた。ただし、室内の活動であるものの、ゲームセンターは女子よりも男子に好まれやすいようである。

※11 カイ二乗検定といい、その値が大きいほど行と列の変数に関連性があることを示す。

## 悩みごと

悩み事については、表19に示したように、過半数の回答者が進路を、また5割弱が勉強を挙げていた。

性別ごとの相対的な比較では、勉強 ( $\chi^2(1)=16.11, p < .01$ )、友人関係 ( $\chi^2(1)=7.67, p < .01$ )について、女子は男子よりも悩みやすいことが示された。

学年ごとの相対比較では、勉強 ( $\chi^2(1)=9.40, p < .01$ ) と部活などのスキルアップ ( $\chi^2(1)=52.85, p < .01$ ) を挙げる回答者が3年生で減少することが示された。また、よくわからないが辛い ( $\chi^2(1)=7.21, p < .05$ ) という回答は1年生の時期にみられやすいものの、3年生になるまでには減少するようである。そして、とくにない ( $\chi^2(1)=8.13, p < .01$ ) とした回答は2年生に多く見られた。これらの結果から、学年の上昇に伴って、悩みが解消されていく様子がうかがわれる。

表19 悩みごと

	女子	男子	1年生	2年生	3年生	合計
家族関係	40 9.6%	24 9.0%	16 7.8%	21 9.3%	27 10.7%	64 9.4%
	0.3	-0.3	-0.9	-0.1	0.9	
進路	252 60.4%	142 53.2%	106 51.7%	141 62.1%	147 58.3%	394 57.6%
	1.9	-1.9	-2.0	1.7	0.3	
勉強	228 54.7%	104 39.0%	108 52.7%	121 53.3%	103 40.9%	332 48.5%
	4.0	-4.0	1.4	1.8	-3.1	
部活や趣味 の スキルアップ	104 24.9%	76 28.5%	65 31.7%	88 38.8%	27 10.7%	180 26.3%
	-1.0	1.0	2.1	5.2	-7.1	
友人関係	108 25.9%	45 16.9%	56 27.3%	49 21.6%	48 19.0%	153 22.4%
	2.8	-2.8	2.0	-0.3	-1.6	
恋愛関係	61 14.6%	46 17.2%	30 14.6%	44 19.4%	33 13.1%	107 15.6%
	-0.9	0.9	-0.5	1.9	-1.4	
経済的な こと	64 15.3%	37 13.9%	23 11.2%	36 15.9%	42 16.7%	101 14.8%
	0.5	-0.5	-1.7	0.6	1.1	
病気・障害	25 6.0%	10 3.7%	10 4.9%	15 6.6%	10 4.0%	35 5.1%
	1.3	-1.3	-0.2	1.2	-1.0	
よくわから ないが辛い	26 6.2%	20 7.5%	20 9.8%	17 7.5%	9 3.6%	46 6.7%
	-0.6	0.6	2.1	0.6	-2.5	
とくにない	52 12.5%	47 17.6%	38 18.5%	21 9.3%	40 15.9%	99 14.5%
	-1.9	1.9	2.0	-2.7	0.8	

各カテゴリーの3行目の数字は調整済み残差

相談相手に関する質問では、表20に示したように、全体的には6割の回答者が友人、次いで5割の回答者が母を挙げていた。性別の相対比較では、男子は女子よりも父 ( $\chi^2(1)=14.78, p < .01$ ) に、女子は男子よりも母

( $\chi^2(1)=9.60, p < .01$ )と友人( $\chi^2(1)=6.59, p < .05$ )を挙げる者の割合が多かった。また、男子は女子よりもいない( $\chi^2(1)=4.49, p < .05$ )と回答する者の割合が高かった。先の悩み事の内容と併せて考えると、女子は友人関係で悩みながらも友人に相談しやすい様子が示され、良くも悪くも友人関係によって影響を受けやすいのかもしれない。対照的に、男子は友人関係で悩むことも少ない代わりに、悩み事を抱えたときの支えになるような友人を得にくいのかもしれない。

相談相手の相対的な違いは性別によるところが見られた一方で、学年による変化はほとんどないようである。統計的に有意な差があると認められたのは、恋人( $\chi^2(1)=8.12, p < .05$ )のみであった。3年生になると恋人に悩み事を相談する者の割合が増加する。なお、カイ二乗検定の結果では、統計的に有意な差があるという水準にはわずかに届かなかったが、調整済み残差の値に注目すると、3年生については先生が相談相手とされる割合が高いことが示された※12。

表20 相談相手

	女子	男子	1年生	2年生	3年生	合計
父	87 20.9%	91 34.1%	60 29.3%	55 24.2%	63 25.0%	178 26.0%
	-3.8	3.8	1.3	-0.8	-0.5	
母	238 57.1%	120 44.9%	105 51.2%	120 52.9%	133 52.8%	358 52.3%
	3.1	-3.1	-0.4	0.2	0.2	
友人	272 65.2%	148 55.4%	120 58.5%	144 63.4%	156 61.9%	420 61.4%
	2.6	-2.6	-1.0	0.8	0.2	
恋人	51 12.2%	43 16.1%	22 10.7%	25 11.0%	47 18.7%	94 13.7%
	-1.4	1.4	-1.5	-1.5	2.8	
先生	75 18.0%	61 22.8%	36 17.6%	39 17.2%	61 24.2%	136 19.9%
	-1.6	1.6	-1.0	-1.2	2.2	
兄弟 姉妹	80 19.2%	41 15.4%	39 19.0%	40 17.6%	42 16.7%	121 17.7%
	1.3	-1.3	0.6	0.0	-0.5	
いない	48 11.5%	46 17.2%	34 16.6%	28 12.3%	32 12.7%	94 13.7%
	-2.1	2.1	1.4	-0.8	-0.6	

各カテゴリーの3行目の数字は調整済み残差

※12 一般的には、カイ二乗検定の分析を行ったのち、有意な偏りがある場合に残差分析を用いることが多いが、本研究では学年の変化と教員の役割の重要性に鑑み、残差分析の結果を尊重した。

## 消費行動

1ヶ月の小遣いについては大きな男女差は見られなかった。表21に示したように、5,000円未満が全体の約4割を占め、もろわないという回答も1割程度あった。

表21 1ヶ月の小遣い

1万円以上	50	7.3%
1万円未満	159	23.2%
5,000円未満	291	42.5%
ない	74	10.8%
必要に応じて	110	16.1%
合計	684	100.0%

小遣いの支出対象についてみると、表22に示したように、全体としては、書籍・雑誌、おやつ・軽食に使用されることが多い。また、ほとんどの回答者が携帯電話の使用料を自らの小遣いでは負担しないと回答している。

男女別で集計したところ、書籍・雑誌( $\chi^2(1)=6.10, p < .05$ )、文具( $\chi^2(1)=4.07, p < .05$ )、衣類・靴・アクセサリー( $\chi^2(1)=44.41, p < .01$ )、化粧品など( $\chi^2(1)=88.30, p < .01$ )については女子の割合が高く、電化製品・玩具( $\chi^2(1)=29.91, p < .01$ )、とくに使うことがない( $\chi^2(1)=5.08, p < .05$ )については、男子の割合が高い。この結果から、女子の方が男子よりも支出対象が多様であるように思われる。また、書籍・雑誌にファッショ

表22 小遣いの支出対象

	書籍・雑誌	化粧品など	文具	携帯電話 使用料
女子	263 63.1%	159 38.1%	171 41.0%	14 3.4%
	2.5	9.4	2.0	0.3
男子	143 53.6%	16 6.0%	89 33.3%	8 3.0%
	-2.5	-9.4	-2.0	-0.3
合計	406 59.4%	175 25.6%	260 38.0%	22 3.2%
	おやつ 軽食	電化製品 玩具	衣類・靴 アクセサリー	とくに使う ことがない
女子	252 60.4%	55 13.2%	194 46.5%	23 5.5%
	0.8	-5.4	6.7	-2.3
男子	153 57.3%	80 30.0%	57 21.3%	27 10.1%
	-0.8	5.4	-6.7	2.3
合計	405 59.2%	135 19.7%	251 36.7%	50 7.3%

各カテゴリーの3行目の数字は調整済み残差

ン誌が含まれ、文具にファンシーグッズのようなものが含まれるとすれば、女子が服飾品、化粧品、持ち物など見た目の華やかさ、かわいらしさにこだわり、限られた小遣いを支出している様子がうかがわれる。これに対して、女子よりも男子が小遣いを出しやすいのは電化製品・玩具であった。ゲーム機、ソフト、携帯電話の周辺機器などの購入に充てるのであろうか。

買い物に行く際、誰と行くかたずねた質問については、表23に示したように、全体的には友人が多く、全体の7割を占める。これに母親、一人が4割で続く。男女別に集計した結果、女子は男子よりも、母( $\chi^2(1)=36.86, p < .01$ )、兄弟姉妹( $\chi^2(1)=6.76, p < .01$ )、友人( $\chi^2(1)=12.91, p < .01$ )と買い物に行くことが多い様子が示された。ただし、一人で行くという回答に男女差が見られなかったことから、女子は家族や友人と買い物に行きやすい一方で、男子はそもそも買い物に行く機会が女子よりも少なく、行く場合には友人と行くということなのかもしれない。

表23 買い物の同伴者

	父と	友人と	母と
女子	51 12.2%	324 77.7%	205 49.2%
	-0.6	3.6	6.1
男子	37 13.9%	174 65.2%	69 25.8%
	0.6	-3.6	-6.1
合計	88 12.9%	498 72.8%	274 40.1%
	恋人	兄弟 姉妹と	一人
女子	59 14.1%	74 17.7%	178 42.7%
	-1.6	2.6	-0.8
男子	50 18.7%	28 10.5%	122 45.7%
	1.6	-2.6	0.8
合計	109 15.9%	102 14.9%	300 43.9%

各カテゴリーの3行目の数字は調整済み残差

### メディアの利用

日常的に利用するメディアに関する質問では、表24に示したように、携帯電話を使ったインターネットが9割程度を占めている。これにテレビが続くが7割程度である。ラジオ、新聞、雑誌を利用する者は少数である。携帯電話によるインターネットに比較して、既存のメディア、特に旧来からあるお金を払って購入する類の活字媒体は人気の低迷が著しいといえる。

男女別にみると、相対的に、女子はテレビ( $\chi^2(1)=8.37, p < .01$ )と携帯電話( $\chi^2(1)=20.89, p < .01$ )を利用しやすく、男子はPCやタブレットを使用しやすいことが示された( $\chi^2(1)=12.91, p < .01$ )。先に示した小遣いの支出対象で、男子は電気製品・玩具を購入しやすいことが示されたが、この結果を併せて推測すると、PCやタブレットの周辺機器、ソフトを購入しやすいとも考えられる。

ソーシャルネットワークサービス(SNS)、WEBの閲覧を含めて、携帯電話の使用時間についてたずねたところ、男女に大きな差は見られず、平均して3時間1分、標準偏差は2時間54分であった。このため、全体の約2/3の回答者は、数分程度から6時間近くまで使用時間に幅があり、0分であっても6時間であってもそれらは極端なケースとはいえないことが示された。

表24 使用するメディア

	テレビ	雑誌	ラジオ
女子	327 78.4%	64 15.3%	31 7.4%
	2.9	1.8	0.3
男子	183 68.5%	28 10.5%	18 6.7%
	-2.9	-1.8	-0.3
合計	510 74.60%	92 13.50%	49 7.20%
	インターネット (携帯電話)	新聞	インターネット (PCやタブレット)
女子	390 93.5%	52 12.5%	93 22.3%
	4.6	-0.9	-3.6
男子	220 82.4%	40 15.0%	93 34.8%
	-4.6	0.9	3.6
合計	610 89.20%	92 13.5%	186 27.2%

各カテゴリーの3行目の数字は調整済み残差

### 選挙への関心

選挙年齢の引き下げが行われたことから、政治や選挙に対する関心を「全然ない(1)」から「非常にある(6)」の6件法でたずねた。全体の平均は3.46、標準偏差は1.55であることから、関心の高さは特に高くも低くもないと考えられる。

性別と学年を要因とする分散分析の結果、統計的に明確な差は確認されなかったが、性別による違いがある可能性がある( $F(1, 678)=2.75, p < .10$ )<sup>13</sup>。図5に示したように、男子よりも女子の方がわずかに政治や投票に対する関心が高い可能性がある。

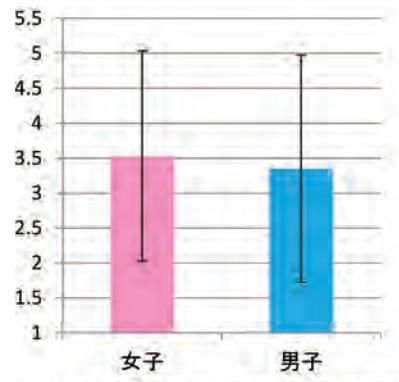


図5 政治や選挙に対する関心の強さ

### 地域に対するアイデンティティ

自分のことを函館の人間だと思うかという質問について「全然感じない(1)」から「強く感じる(5)」の5件法でたずね、性別、学年を要因とする分散分析を行ったところ、性別や学年による違いは認められなかった。全体の平均は3.77、標準偏差は1.22であり、全体的にやや高い値を示した。

一方、同様に北海道民としての自覚をたずねた質問では、性別( $F(1, 678)=10.58, p < .01$ )、学年( $F(1, 678)=3.67, p < .05$ )で差が見られることが確認された。図6に示したように、女子は男子よりも、また3年生は2年生よりも(1年生は2年生、3年生と統計的に有意な差は確認されなかった)、道民としての意識が高い様子がうかがわれた。全体としては平均4.25、標準偏差0.98であり、高い位置に集中していると言える。ここで函館と北海道に対する得点を比較したところ、( $F(1, 683)=140.83, p < .01$ )であり、函館よりも北海道に対するアイデンティティの強さがうかがわれた。このことは、先に示した表11で、最も

\*13  $p$  値が5%よりも小さくない場合、10%未満である場合には、明確には有意な差があるとは判定されないが、有意な傾向があるとされる。

多くの回答者が卒業後は札幌などの道内他地域で暮らしたいと回答したことを併せて考えると、札幌で道民として生活することにあこがれを感じている様子が反映されているのかもしれない。

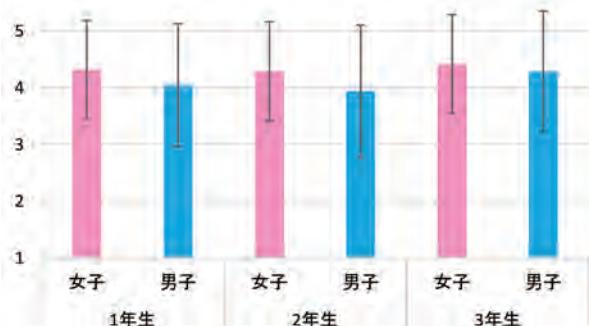


図6 北海道民としてのアイデンティティ

### 函館に対する愛着

函館の中の好きなエリアについてたずねたところ、表25に示したように、大半の回答者が好きと回答するような場所はなかった。全体の40%程度の回答者が西部地区と美原地区を上げていた。イトーヨーカドー、ドンキホーテ、ヤマダ電機などの比較的大きな小売店があることが美原地区に対する人気の理由であろうか。これに対して、古い建物が多い西部地区に人気があることについては、観光客同様、高校生が函館の観光地としての景観を好んでいるとも考えられるが、巨大ショッピングモールのような大型商業施設が存在しない函館では、元来、観光客を主たる顧客として開店した赤レンガ倉庫、ラッキーピエロ、スターバックスといった商店が集まり、比較的人々がにぎわう雰囲気を漂わせていることが、このエリアの人気の理由であるとも考えられる。

また、特に好きなエリアはないとした回答は少数であり、高校生の地域に対する愛着は分散しているとも考えられる。

表25 好きなエリア

西部地区	274	40.1%
美原地区	268	39.2%
函館駅周辺	238	34.8%
本町周辺	200	29.2%
湯の川地区	107	15.6%
石川町周辺	101	14.8%
昭和周辺	171	25.0%
特に好きなエリアはない	106	15.5%

好きな施設・イベントについてたずねた質問については、表26に示したように、6割近い回答者が函館山・夜景を上げている。好きだからといって頻繁に訪れるとは考えにくいものの、高校生にとって函館山は函館を象徴する存在であると考えられる。また、過半数の回答者が港まつりとクリスマスファンタジーに好意的な回答をしていることから、高校生がまちを挙げての巨大イベントを好む様子がうかがわれる。これに対して、函館山の夜景同様、全国的に有名な五稜郭や旧公会堂など、歴史的な建築物はやや人気が落ちるようである。

また、一般の人が訪れにくい港や、隣接する町の駒ヶ岳・大沼を挙げる回答者は皆無であった。

愛着とは反対に、不満を感じさせる理由になると考えられる函館に必要と思う施設についてたずねたところ、表27に示したように、全回答者の3/4がショッピングモール、  
**表27 必要と考える施設**  
 アウトレットモールなどの大型商業施設を挙げた。実際に、過去に何度も出店計画があったとされるが、高校生のニーズは非常に高いと考えられる。5割近い回答者

**表26 好きな施設・イベント**

函館山・夜景	398	58.2%
港まつり	356	52.0%
クリスマスファンタジー	350	51.2%
旧公会堂などの歴史的建造物	271	39.6%
五稜郭・奉行所	166	24.3%
五稜郭タワー	155	22.7%
路面電車	127	18.6%
緑の島	98	14.3%
FMIいるか	26	3.8%
NCV	22	3.2%
駒ヶ岳・大沼	0	0.0%
函館港	0	0.0%
好きなものはない	60	8.8%

がテーマパークを挙げたことは娯楽施設が十分でないことへの不満の表れかもしれないが、同時に、5割以上の回答者が科学館・水族館・プラネタリウムといった教養施設を挙げており、単に享楽的な消費、遊戯を求めるばかりでなく、文化水準を支えるような施設を求める傾向もあることが示された。

大学学部の設置については、医学部を必要と答えた回答者が2割いたが、全体的にはさほど必要とされる様子はないように思われる。しかし、当然ながら、進学したい学部は個人によって異なるため、特定の学部が集中的に必要とは考えられないとしても、全体としては大学の増設を望む回答者は一定数存在すると考えられる。いずれか一つでも学部の設置を望んだ回答者を集計したところ、全体の32.7%にあたる223人であった。さらに、大学進学を希望している回答者345人に絞れば、42.3%にあたる146人が何らかの学部の設置を希望していた。専門学校への進学希望者(26.7%)、就職希望者(15.9%)も希望する者がいたことから、地元に学びたい内容が学べる学部がないために大学への進学をあきらめている者も一定数存在すると考えられる。

#### 性別、学年、進路、職業、希望居住地の関連性

最後に、函館からの若者の流出を考える手がかりとして、進路、職業、希望居住地を関連付けてとらえる分析を行った。ここでは多重応答分析<sup>※14</sup>を使用し、図7に示したように、各項目が同時に2次元上の平面にプロットされ、関連性が強いもの同士が近くに表示されるようになっている。

推定された次元について解釈すると、図の左側に現業・技能関連職があり、右側に事務職・サービス業があることから横の第1次元は職業内容の志向性の軸であると考えられる。なお、進路や職業について決めていないという回答が左端にあるが、これは、右端に行くほど資格などの専門性を必要とするものであるために、それらに対する選択が行われていない段階では右端に位置すると考えられる。

※14 プロファイリングと同様の分析であり、一見して関連性がないと思われる変数間に関連性を見つけ出すために行われる分析である。

他方、図の下部には進路・職業を決めていないという項目や、放送関係、芸能関係といったやや一般的ではないと考えられる職業があり、上部には高校卒業後の就職や一般的な職業と考えられる会社員が位置している。これらより、縦の第2次元は職業生活の具体性を示していると考えられる。

これらの軸の解釈を前提として、個別の項目についてみると、全体的に男子は現業・技術関連職、女子はサービス・事務関連職を選択しやすいと考えられる。また、学年が上がるにしたがって、プロットの位置が上昇することから、成長に伴って現実的な職業観が形成されていく様子がうかがわれる。

短大への進学を希望する回答者は少なかったが、この図からは、短大進学希望者は職業意識が明確である様子がうかがわれる。反対に大学は図の下部に位置しており、

モラトリアムの時期を過ごす場所として、職業意識が明確でない生徒が進学を希望しやすい進路先と考えられる。

ここで希望居住地域のプロットとその周辺に注目すると、函館への居住は教員・保育士、やや離れてサービス業、会社員、就職といった項目がプロットされている位置に近い。このことから、函館に居住しようと考える高校生は、卒業後に、ある程度現実的な職業選択を行っている者が多いと考えられる。

これに対して、道内他地域、道外他地域、どこでもよいといった項目は図の下部にある。また、進路・職業を決めていない、1年生、大学への進学といった項目と近い位置にある。これらを総合すると、将来の職業イメージが明確になっていない高校生は、とりあえず大学に進学しようと考え、函館外の地域に将来の可能性を求める傾向が強いのではないかと考えられる。

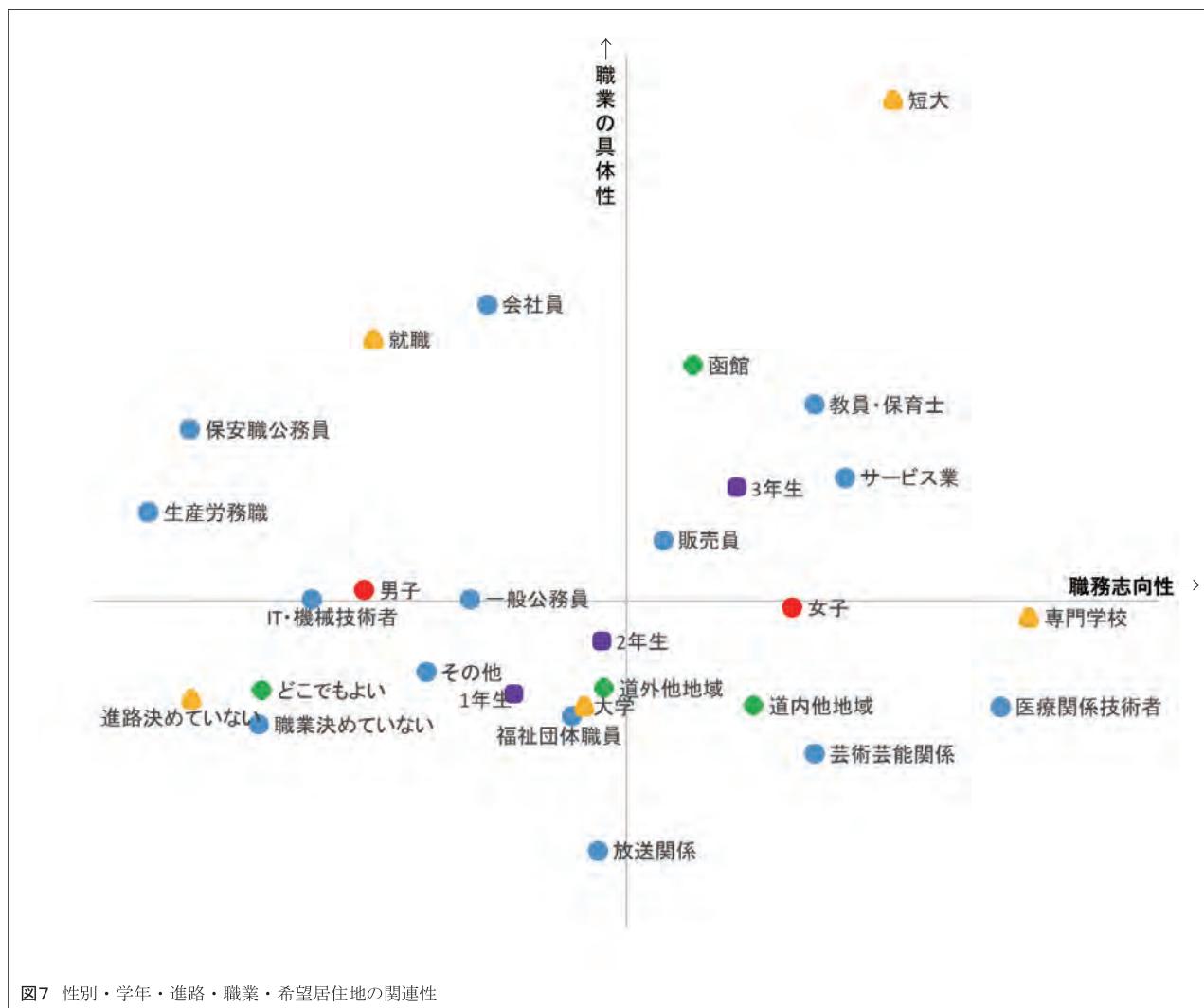


図7 性別・学年・進路・職業・希望居住地の関連性

## あとがき・総括

全体的にみて、函館の高校生は学校生活についておおむね満足しており、また、函館に対する愛着も抱いていいると考えられる。しかしながら、半数の回答者が西部地区や美原地区を好み、港まつりやクリスマスファンタジーといったイベントを好み、8割近くの回答者が大型商業施設を求めていることは、彼らがにぎわいのある物質文化、消費文化を求める一方で、そうした要望が十分に果たしえない函館の現状を反映しているように思われる。

このため、多くの回答者が函館を象徴する函館山・夜景を好きであると回答しているものの、日常的に函館山を訪れないであろうことを考慮すれば、函館という郷土に対する誇りは感じられていても、卒業後は函館を離れ、都会的な生活を送ることができる札幌や都心で生活することを希望していると考えられる。また、函館の大学には学習内容について十分に選択の余地がないことが、函館から離れようとする動機に拍車をかけていると考えられる。

他方、函館に残留することを希望する回答者たちについてみると、高校卒業後、就職を希望する回答者の半数が函館で暮らすことを希望していた。このことは、地元企業にとっては一面で歓迎すべきことであるとも考えられるが、同時に、高等教育を受けた将来の幹部候補になりうる人材や高度な専門性を有する人材が函館には残りにくくとも意味している。こうした人材が函館にとってどのくらい需要があるのかについては本稿の範囲を超えるが、仮に函館が高度な教育を受けた人材を一定程度必要とするのであれば、一旦、函館を離れて進学し、高い資質を身につけた若者たちが再び郷土に戻って生活することに、あるいは、函館以外の土地からやってきて生活することに、物質文化、消費文化の面で魅力を見出せるような社会環境を整える必要があるだろう。



## 付録A 質問項目

### 学校生活

はじめに、学校での様子についてうかがいます。

●春夏秋(雪のない時期)の通学時間はどのくらいですか？

●冬（雪のある時期）の通学時間は何分くらいですか？

●主な通学手段は何ですか？

あてはまるものをすべて選択してください。

自転車

バス

路面電車

JR

自家用車

徒歩のみ

●全体的に見て、学校生活について満足していますか？

全然満足していない 非常に満足している

1 2 3 4 5 6

●全体的に見て、通っている学校の先生は信頼できますか？

全然信頼できない 非常に信頼できる

1 2 3 4 5 6

●全体的に見て、他の生徒との人間関係は良好ですか？

全然よくない 非常によい

1 2 3 4 5 6

●学習への意欲はありますか？

全然ない 非常にある

1 2 3 4 5 6

●学習内容は理解できていますか？

全然できていない ほぼ全てできている

1 2 3 4 5 6

●部活動や生徒会活動など、

勉強以外の学校の活動に対して意欲がありますか？

全然ない 非常にある

1 2 3 4 5 6

●得意な教科は何ですか？

あてはまるものをすべて選択してください。

英語

国語

数学（数Ⅰ、数Ⅱいずれかでも）

理科（物理、化学、生物、地学のいずれかでも）

公民（倫理、政経いずれかでも）

地歴（地理、日本史、世界史いずれかでも）

芸術（美術、音楽、書道、工芸いずれかでも）

技術・家庭

体育 得意な教科はない

その他

### 希望進路

将来の希望についてうかがいます。

●現在の学校を卒業した後に希望する進路は何ですか？

以下のうちから一つを選んでください。

就職

大学

短大

専門学校

まだ決めていない

その他：

●進学をする場合、進学先を選ぶのに重要なポイントは

何ですか？あてはまるものをすべて選択してください。

※進学するつもりのない人は「進学するつもりはない」

を選択してください。

進学するつもりはない

学科、専攻、コースなど、学べる内容

合格難易度

学費の安さ

自宅から通えること

国公立であること

資格取得や将来の職業につながること

札幌や東京などの大都市にあること

世間の評判が高い、いわゆる「有名大学」「有名校」

であること

部活やサークルが充実していること

その他：

●希望する将来の職業は何ですか？

以下のうちから一つ選んでください。

- 会社員（事務、営業など）
- 自営業・会社経営
- 農家・漁師
- 販売員（ショップ、スーパーなどの店長・店員）
- サービス業（理容師、美容師、調理師、ウェイタース、ホテルマン、キャビンアテンダントなど）
- 放送関係（アナウンサー、ディレクター、プロデューサーなど）
- 芸術芸能関係（画家、音楽家、陶芸家、カメラマン、俳優、スポーツ選手、ダンサーなど）
- 生産労務職（職人、工員、大工、建設作業員など）
- 運輸職（電車・トラック・バス・フォークリフトなどの運転）
- IT・機械などの技術者
- 法律関係の専門家（裁判官、弁護士、検察官、司法書士、公認会計士、税理士など）
- 医療関係の技術者（医師、看護師、薬剤師など）
- 福祉団体の職員（福祉士、介護士、ケアマネージャーなど）
- 幼稚園・小学校・中学校・高校の教師、保育士
- 公務員（事務職、技術職、現業）
- 保安職公務員（警察官、消防士、自衛艦、海上保安官）
- 研究者（研究所の研究員、大学の教員など）
- 主婦・家事手伝い
- まだ決めていない
- その他

●あなたは函館のまちをどのくらい好きですか？

全然好きではない                            非常に好きだ

1      2      3      4      5      6

●高校を卒業したら、どこで暮らそうと考えていますか？

以下の中から1つを選んでください。

- 函館市内、および北斗市、七飯町などの函館市近郊
- 札幌、旭川、帯広などの北海道内の他地域
- 東京、仙台、大阪などの北海道外の他地域
- 海外
- どこでもよい

暮らししぶり

日常の暮らししぶりについてうかがいます。

●毎朝、だいたい何時に起きていますか？

●毎晩、だいたい何時に寝ていますか？

●朝食は食べていますか？

- だいたい毎日食べている
- 食べたり食べなかつたりしている
- ほとんど食べない

●学校での授業を除いて、1日に平均してどのくらい勉強しますか？

●以下のうち、1週間に1回以上利用する学習施設・業者はありますか？あてはまるものをすべて選択してください。

- 放課後の学校（教室、図書室、自習室など）
- 中央図書館
- 青年センター（自習コーナー）
- 塾・予備校
- 家庭教師
- とくにない
- その他：

●勉強以外に打ち込んでいる活動はありますか？

あてはまるものをすべて選択してください。

- 学校の部活
- 習い事
- 学校外のサークル
- 個人的な趣味
- 資格の取得
- 英語検定
- ボランティア
- アルバイト
- とくにない
- その他：

●以下のうち、1ヶ月に1回以上利用する余暇（遊びや楽しみ）のための施設、店舗はありますか。  
あてはまるものすべてを選択してください。

- 映画館
- ショッピングモール
- カラオケ
- ゲームセンター・アミューズメント
- 書店
- レンタルビデオ店
- ファーストフード・喫茶店
- 公園・森林・海・山
- ジム・プールなどのスポーツ施設（民間）
- ジム・プールなどのスポーツ施設（公共）
- 公共の文化施設（図書館、美術館、博物館、○○センターなど）
- とくにない
- その他：

●現在、真剣に考えたり悩んだりしていることはありますか。あてはまるものをすべて選択してください。

- 家族関係
- 進路
- 勉強
- 部活や趣味のスキルアップ
- 友人関係
- 恋愛関係
- 経済のこと
- とくにない
- 病気・障害
- よくわからないがとにかく辛い
- その他：

●悩み事を相談できる人は誰ですか？

- あてはまるものをすべて選択してください。
- 父
- 母
- 友人
- 恋人
- 学校の先生
- 兄弟姉妹
- いらない
- その他：

●以下のうち、日常的によく利用するメディアは何ですか？

- あてはまるものをすべて選択してください。
- テレビ
- ラジオ
- 新聞
- 雑誌
- 携帯電話（ガラケー、スマホ）によるインターネット
- パソコン
- タブレットによるインターネット
- とくにない
- その他：

●政治や選挙に関心はありますか？

- |      |       |   |   |   |   |
|------|-------|---|---|---|---|
| 全然ない | 非常にある |   |   |   |   |
| 1    | 2     | 3 | 4 | 5 | 6 |

●ラインやツイッター、WEBの閲覧などを含めて、  
1日に携帯電話をどのくらいの時間、使用しますか？

●1ヶ月のお小遣いはいくらですか？

- ない
- 5,000円未満
- 1万円未満
- 1万円以上
- 必要に応じてもらう

●お小遣いで買うものは何ですか？

- あてはまるものをすべて選択してください。
- 書籍・雑誌
  - 文具
  - おやつ
  - 軽食
  - 衣類・靴・アクセサリー
  - 化粧品・ネイル・カラーコンタクト・エクステ、エステなどのおしゃれ・美容
  - 携帯電話の使用料
  - 電化製品・玩具（ICプレーヤー、ゲーム機、ゲームソフト、模型、手芸など）
  - とくにない
  - その他：

●お小遣いで買い物をする際、誰とよく出かけますか？

- あてはまるものをすべて選択してください。
- 父
  - 母
  - 兄弟姉妹
  - 友人
  - 恋人
  - 一人で
  - その他：

**函館に関する質問**

あなた自身の函館に対するイメージをうかがいます。

●自分のことを函館の人間だと感じますか？

- |        |       |   |   |   |   |
|--------|-------|---|---|---|---|
| 全然感じない | 強く感じる |   |   |   |   |
| 1      | 2     | 3 | 4 | 5 | 6 |

●自分のことを北海道の人間だと感じますか？

- |        |       |   |   |   |   |
|--------|-------|---|---|---|---|
| 全然感じない | 強く感じる |   |   |   |   |
| 1      | 2     | 3 | 4 | 5 | 6 |

●あなたが好きな函館のエリアはどこですか？

- あてはまるものをすべて選択してください。
- 函館駅周辺
  - 本町（五稜郭電停）周辺
  - 西部地区（十字街、末広町）周辺
  - 湯の川周辺
  - 美原（イトーヨーカドー・ドンキホーテ）周辺
  - 石川町（トイザラス）周辺
  - 昭和（昭和タウン）周辺
  - 特に好きなエリアはない
  - その他：

●以下の函館に関連するもののうち、あなた自身が好きなものがありますか？

- あてはまるものをすべて選択してください。
- 函館山・夜景
  - 五稜郭・奉行所
  - 旧公会堂・赤レンガ倉庫などの歴史的建造物
  - 駒ヶ岳・大沼
  - 函館港
  - 緑の島
  - 路面電車
  - 五稜郭タワー
  - FMいるか
  - NCV
  - 港まつり
  - クリスマスファンタジー
  - 好きなものはない
  - その他：

●以下のうち、函館に今後ぜひ必要だと思うものはありますか？あてはまるものをすべて選択してください。

- 大型商業施設（ショッピングモール・アウトレットモール）
- テーマパーク
- 科学館・水族館・プラネタリウム
- 遊泳可能なビーチ
- 大学の医学部
- 大学の理学部・工学部・薬学部
- 大学の獣医学部
- 大学の文学部
- 大学の法学部・経済学部
- とくにない
- その他

●以下のうち、公共交通機関（路面電車、バス）に関する希望はありますか？

- あてはまるものをすべて選択してください。
- バスの運行本数を増加する
  - バスの運行経路をわかりやすくする
  - バスを夜10時以降も運行する
  - 道路の除雪を徹底し、バスの遅れをなくす
  - 路面電車の運行本数を増加する
  - 路面電車の路線を拡充する
  - 路面電車を夜10時以降も運行する
  - バスや路面電車の外装をカッコよく・おしゃれにする
  - バスや路面電車の運賃を下げる
  - SUICA や PASMO のような IC カードを利用できるようにする
  - とくに希望することはない
  - その他

### 属性

あなたの年齢や性別など、回答者ご自身についてうかがいます。

#### ●性別

- 女性
- 男性

#### ●年齢

- 15歳
- 16歳
- 17歳
- 18歳
- 19歳
- 20歳
- 20歳以上

#### ●学年

- 1年生
- 2年生
- 3年生

#### ●学校の種別

- 私立の普通科
- 私立の専門学科（農業・商業・工業・水産・家政・福祉・看護・芸術など）
- 公立の普通科
- 公立の専門学科（農業・商業・工業・水産・家政・福祉・看護・芸術など、高等専門学校を含む）

## 付録B

高校生に配布したチラシデザイン

# JK<sup>アンド</sup>DK 大調査

## 函館市内の高校生 生活実態調査

函館市青年センターでは北海道教育大学函館校今在研究室(心理学)と協同で高校生対象の生活実態調査を行っています。皆さんは普段どのように学び、遊び、そして、どんな夢や希望を持って暮らしているでしょうか？  
私たちは、函館が若者にとってもっと暮らしやすい街になるためには何が必要か考えています。  
皆さんの率直な意見を聞かせてください。

なお、アンケートに回答していただいた方の中から抽選で**50名の方に図書カード**を差し上げます。  
10分程度で終了する簡単なアンケートなのでふるってご参加ください。回答締切日／8月31日(水)

**当選本数一覧**

1等	5,000円×3本
2等	3,000円×7本
3等	2,000円×15本
4等	1,000円×25本

QRコードを読み込んで  
アンケートに回答してください。  
Google Formsに飛びます

あなたの整理番号  
[ ]

読み込めない場合はこちら  
<https://goo.gl/gn5NPe>

函館市青年センター  
公式マスコットキャラクター  
にゃん吉

函館市青年センター  
ホームページ：<http://hako-youth.com>

お問い合わせ先／函館市青年センター TEL (0138)51-3390 開館時間／9:00～22:00 (水曜のみ17:00～) 函館市青年センター 検索



## MEMO

**函館市内の高校生生活実態調査 報告書**  
(JK&DK 大調査)

**発行者**

函館市青年センター長 仙石 智義 (NPO 法人函館市青年サークル協議会 理事)  
北海道教育大学函館校 准教授 今在 慶一朗

**発行日**

平成 28 年 11 月 30 日

**連絡先**

函館市青年センター  
〒 040-0013 北海道函館市千代台町 27 番 5 号  
TEL 0138-51-3390